

令和4年度 県立水戸第一高等学校自己評価表

目指す学校像	○授業を中心とした、意欲的で活気ある学習活動を展開する学校 ○生徒が、特別活動(学校行事、ホームルーム、生徒会活動)、部活動など多様な活動機会の中で切磋琢磨し、能動的な経験を蓄積しながらたくましく成長できる学校 ○生徒一人ひとりの進路希望実現に貢献できる学校		
昨年度の成果と課題	重点項目	重点目標	達成状況
【成果】 令和3年度(2021年度)の重点項目に関する11の重点目標の達成状況は、Aが0、Bが10、Cが0であり、総括的には目標を達成できたといえる。Aが0というのは、評価を見直し、ABCそれぞれの基準を厳格に当てはめた上での評価である。 進学状況については、国公立大学・準大学の現役合格者数が137名、既卒者を加えた総数は191名となった。難関大学(東北・東京・名古屋・京都・大阪・東工・一橋)については、現役36名、既卒13名が合格した。東京大学は現役11名、既卒3名で、14名となり、昨年ほどの合格者ではなかったが健闘した。また医学部医学科合格者は、全国的に厳しい入試が続く中、国公立大学・準大学は現役5名、既卒4名の計9名、私立大学は現役4名、既卒6名となった。2年生になった直後の2カ月および3年生9月の臨時休校により、学習活動が十分に支援できなかったことが課題である。 特別活動については、コロナ禍にあってもできるだけ通常通りの学校行事を行うことに努め、学苑祭(文化祭)・クラスマッチ・歩く会を規模を縮小しながらも実施できた。生徒の自主的な感染対策と運営は、難しさもあったが、より意義深いものとなった。部活動でも感染対策を講じながらの活動が余儀なくされたが、数団体が全国大会に出場するなど例年と変わらない成果を収めた。 【課題】 令和2年度から医学コースの設置、令和3年度は中高一貫教育校の開校となり、新たな校務分掌の見直しを行ったが、今後も見直しと検証が必要である。そのための情報収集及び情報の発信等、広報活動に努めるとともに、教職員の働き方改革についても引き続き推進する。	教育課程の工夫改善と学習指導の充実	①新学習指導要領の導入及び大学入学共通テストを踏まえ、教育課程の検証を進める。	B
		②ICT機器(タブレット及び電子黒板)を活用して、より教育効果の高い学習指導の充実に努める。	B
		③夏季課外(1日4コマ)を円滑に実施し、生徒の進路希望実現に資する学力の向上を図る。	B
		④生徒の授業満足度を高めるため、60分授業の質の向上を目指して、授業に係る研修機会の確保・充実に努める。	B
	進路意識の高揚と確かな学力の養成による進路希望の実現	⑤難関大学(旧7帝大+東工大+一橋大)や国公立大医学部医学科等への進路希望実現を支援し、現役進学率の向上及び既卒生を含めた国公立大学合格者数の増加に努める。	B
		⑥卒業生の協力を得るとともに、大学や病院と連携して高い志を持って医学部に進学し、将来医師として社会に貢献できる人材の育成に取り組む。	B
	健康安全指導の充実及び法令遵守の推進	⑦健康安全に留意し、心身ともに健康で、生き生きとした学校生活を生徒が送れるよう指導する。 ⑧職員が健康で職務に従事できるよう業務精選に取り組み、法令遵守についても評価面談で確認する。	B
	特別活動等の充実	⑨特別活動(学校行事、ホームルーム、生徒会活動)、部活動等の充実をはかり、創造性を養い、自主自立の精神の確立に努める。	B
		⑩学校行事を適切に配置し、時に臨機応変に対応することにより、各行事の円滑な実施と充実に努め、新たな伝統の創造を目指す。	B
	将来を見据えた教育活動の拡充、特に医学コースの充実や中高一貫教育校の円滑な運営	⑪社会の変化に対応し、本校から世界に羽ばたく人材、グローバルな視野を持って地域社会の発展に貢献する人材の育成のため、附属中学校の職員・生徒との連携を深めつつ、中高一貫教育や医学コースの情報の収集と発信を行いながら組織の拡充に努める。	B
三つの方針			
「三つの方針」 (スクール・ポリシー)	「育成を目指す資質・能力に関する方針」 (グラデュエーション・ポリシー)	○社会の変化に対応し、グローバルな視点をもって茨城から世界に羽ばたく人材、高い志と使命感を兼ね備え、地域医療の発展に貢献する人材の育成	
	「教育課程の編成及び実施に関する方針」 (カリキュラム・ポリシー)	○県内の学習指導、進学指導を牽引するリーダー校として、生徒の高い志に対応した教育課程による難関大学及び医学部志望者の進路実現	
	「入学者の受入れに関する方針」 (アドミッション・ポリシー)	○真理を愛する学問第一の校風の下、様々な分野に興味を持ち、深く探究しようという強い意欲のある生徒 ○自主自立の精神を重視する自由な校風の下、特別活動、部活動など多様な活動機会の中で切磋琢磨し、能動的な経験を蓄積しながら取り組む意欲のある生徒 ○「至誠一貫・堅忍力行」の気風の下、高い志を持ち挑戦と失敗を繰り返しながら、進路実現を目指して日々努力する生徒	

評価項目		具体的目標	具体的方策	評価		次年度(学期)への主な課題
国語	各科共通	教科指導全般	○生徒が主体的に学習に取り組むよう、進路意識を高揚させながら指導する。	A	B	○国語力が全ての教科の基礎となることを意識させて指導していく。
		充実した授業を展開し、各教科・科目の目標を達成する。	○60分授業の効果を高めるため、授業の進度や指導内容を再構築し、授業内容の充実に努める。 ○ICT機器(タブレット及び電子黒板)を活用して、より教育効果の高い学習指導の充実に努める。	B		○新課程に合わせた授業展開、授業内容の充実を学年間で確認しながら検討していく。 ○次年度は全学年が一人一台端末を持参することになるため、より教育効果の高いICT機器活用授業の展開を引き続き検討していく。
			○60分授業を生かした指導方法等のさらなる改善を図るための研修を実施する。	B		○研究構想部主催の相互授業参観や、研修に積極的に参加し、学習指導の向上に努める。
	国語	国語の学習に対する意欲・関心を高める。	○授業方法を工夫改善し、教員相互に授業を公開するなど、随時教科内における研修等を行い、指導方法に対する研究を深めていく。 ○指導内容・方法・進度について、各学年の担当者間での打合せを綿密に行う。 ○中高の連携を強化し、中学生と交流する機会を通して学びの意欲を高める。	B	B	○新課程(1・2年)学年の授業の相互参観や、指導法については引き続き教科全員で研修を積んでいく。 ○引き続き担当者間の連携を綿密にし、指導内容・進度の充実を図る。 ○令和4年度は「中学生による高校の授業参観」を2コマ実施できたので、今後も互いの学びの意欲を高める契機としていく。
		基礎学力の定着を図り、段階的に難関大学入学試験に対応できる学力の養成を図る。	○小テスト等によって基礎学力の定着を図る。 ○新学習指導要領・大学入学共通テストに対応するための学習指導の在り方について検討を進めていく。 ○適宜添削指導を実施し、難関大学入試に対応可能な文章読解力と表現力の養成を図る。 ○副教材等を利用し、学習内容の活用を図る。 ○定期考査について基本から発展までの設問構成を工夫し、平均点50～60点台の問題を考案する。	B		○古典文法や漢文の句法等の知識分野を2年生までに定着させ、読解力や表現力の伸長に早めに結びつけていきたい。 ○新課程、大学入学共通テストについては引き続き検討を進めていく。 ○添削指導等の研修を積み、生徒の読解力・表現力の育成に努める。 ○各年次で使用した副教材の情報を互いに共有し、次年度にいかしていく。 ○平均点の設定や、設問構成の工夫は引き続き行い、観点別評価の検証も同時に行い改善していく。
		自立的な学習を促し、豊かな言語能力を持った生徒を育成する。	○課題等を生徒の実態に即して適宜与え、生徒が自主的に学ぶ姿勢を育み、段階的に自立的学習に移行できるよう促す。 ○読書意欲や創作意欲を喚起し、各種コンクールへの取り組みを奨励する。	A		○3年間を見通した目標設定を生徒に示すことで、自主的に学ぶ姿勢を引き続き身につけさせていく。 ○次年度も様々なコンクール等を提示し、読書意欲や創作意欲の喚起につなげていきたい。
地歴公民	各科共通	教科指導全般	○生徒が主体的に学習に取り組むよう、進路意識を高揚させながら指導する。	A	B	○生徒の興味関心が高まるように、教科書の内容にとどまらず、大学の学問分野との関連を意識しながら、その魅力を伝えられるような授業を展開してきた。次年度はより生徒が主体性に取り組むことができるような授業の形態等について検討していきたい。
		充実した授業を展開し、各教科・科目の目標を達成する。	○60分授業の効果を高めるため、授業の進度や指導内容を再構築し、授業内容の充実に努める。 ○ICT機器(タブレット及び電子黒板)を活用して、より教育効果の高い学習指導の充実に努める。	B		○新課程に合わせた年間計画や授業展開についての検討を継続する。 ○電子黒板を利用した授業は定着している。今後は電子黒板のみならずタブレットをどのような場面で活用するのが有効かを検討していきたい。
			○60分授業を生かした指導方法等のさらなる改善を図るための研修を実施する。	B		○教員間の情報交換を密にして授業方法の改善を図り、生徒が主体的活動する授業のあり方を模索していきたい。
	地歴公民	綿密な教材研究や授業改善を図るとともに、大学入試問題の研究を継続的にを行い、進路実現のための確かな学力を養成する。	○教員相互間での研修により専門性を高め、生徒の知的好奇心を喚起する授業の実施を目指す。 ○基礎・基本を徹底させるとともに、自ら思考する能力、資料を分析する能力、課題に取り組んでいく姿勢等を身につけさせる。 ○国公立大個別試験、難関私立大学試験、共通テスト等の分析を綿密に行い、授業、定期考査、校内模試等へ反映させることにより生徒の学力向上を図る。	A	B	○入試問題の検討や、生徒の添削指導なども教員間で共有し、より質の高い授業や個別指導を実施していく。 ○より高度な内容を学びたい生徒から、基礎・基本の振り返りの学習を必要とする生徒まで、多様な生徒の学習ニーズに応えられるような授業づくり・教材づくりに励む。 ○各科目とも、資料の活用、大学入試の二次試験問題、大学での学問研究を意識した探究活動など、深い学びを伴う授業展開を行った。定期テスト、実力テストだけでなく、入試問題も含めて教員間で検討することを通して、教員の力量を高めると同時に、生徒の力を伸ばしていく。

評価項目		具体的目標	具体的方策	評価		次年度(学期)への主な課題
教 学		教科研修の充実によって、教員の授業力の向上をはかるとともに、新学習指導要領、中高一貫教育、評価方法の研究を進める。	○科目担当者間での授業の進捗、指導方法など綿密な打合せを行い、課題意識を共有し、指導を充実させる。 ○ICT機器やソフトウェアの活用方法に対する研究を継続的に実施していく。 ○新学習指導要領、中高一貫教育に対する研究を継続的に実施していく。 ○生徒の学習活動・能力を的確に評価する方法の研究を実施していく。	B		○今後も教員個人のみならず、教員間でも研鑽を積み、より高い質の授業が展開できるように改善を継続する。
	各 科 共 通	教科指導全般	○生徒が主体的に学習に取り組むよう、進路意識を高揚させながら指導する。	A	B	入試情報に振り回されることのない確かな学力像を生徒が自ら持つよう働きかける。
		充実した授業を展開し、各教科・科目の目標を達成する。	○60分授業の効果を高めるため、授業の進捗や指導内容を再構築し、授業内容の充実に努める。 ○ICT機器(タブレット及び電子黒板)を活用して、より教育効果の高い学習指導の充実に努める。	A		経験豊かな教員の数学教育の知見を吸収し、次世代にデジタル化して残していく。
			○60分授業を生かした指導方法等のさらなる改善を図るための研修を実施する。	B		教育課程変更後の入試に向けた力を生徒がつけることができるように、情報を共有する。
		授業に積極的に取り組ませるとともに、自主的に数学に取り組む態度を育成する。	○低学年では予習復習を励行させ、教科書内容を定着させ、入試に必要な基礎力の定着を図る。 ○学年の進捗とともに課題の在り方を検討し、低学年では課題等の提出を習慣化させ、高学年では自主的学習に移行できるように促す。 ○学年担当者間の連携を密にし、教材の精選と授業内容の充実を図るとともに、多様な見方・考え方を例示するなどして、数学に対する生徒の興味・関心を高める。 ○電子黒板などICT機器の実践事例やノウハウを蓄積し、職員間で共有し実践することで生徒の授業理解の深化を図る。	B	B	新1・2年次生向けの新課程での教材は、教科書会社も試行的な編集が見られた。教材選択が生徒の学習に影響しないよう、ICTの関わった授業の進め方を十分に検討し、生徒自らが基礎力を定着できるようにする。
		進路実現のための学力向上を図る。	○調査・試験・課題の問題は学年全体で精選検討を重ねるとともに、結果についても分析を行い、継続的な指導に活かす。 ○大学入試問題等を日頃から研究し、積極的に授業に取り入れ、大学個別入試および新テストに対応できる力をつけさせる。 ○大学入試問題分析会(東京大・京都大・東北大)を実施し、入試問題研究や教材研究により教員のレベルアップを図る。	A		新1・2年次生では新課程での入試になるため、引き続き外部の講演会も含めて情報収集し、教員間で共有していく。生徒に対しては実力試験、定期考査や章末テストでの問題を精選することで学習効率向上を狙って還元していく。
理 科	各 科 共 通	教科指導全般	○生徒が主体的に学習に取り組むよう、進路意識を高揚させながら指導する。	A	B	○生徒の主体的な取り組みを高めるような指導法・教材・教具の工夫をしてきたが、来年度もさらに一層工夫を進めていきたい。
		充実した授業を展開し、各教科・科目の目標を達成する。	○60分授業の効果を高めるため、授業の進捗や指導内容を再構築し、授業内容の充実に努める。 ○ICT機器(タブレット及び電子黒板)を活用して、より教育効果の高い学習指導の充実に努める。	B		○生徒の授業に対する定着度を観察しながら、各科目において授業内容の充実に努めた。記述や議論などの生徒の主体的な活動についても、継続して取り組んでいきたい。 ○より効果的なICT機器の活用方法について今後も検討していきたい。
			○60分授業を生かした指導方法等のさらなる改善を図るための研修を実施する。	B		○本年度は新課程における観点別評価について検討を行ってきた。生徒の評価からみえてきた課題を共有し、授業時の指導方法の改善に活かしていきたい。
		知的好奇心を育て、科学的な思考力・判断力・表現力が身につくよう、教員の授業力の向上を図り、授業展開を工夫する。	○自然科学の様々な事象現象について深く考察し、科学的な思考力・判断力・表現力を身につけられよう、観察・実験において主体的・対話的な学びの授業展開を工夫し実践する。 ○重要な図やデータの考察・理解にデジタル教材の活用を促し、知識の習得と整理がしやすくなるようにする。 ○最先端の科学技術について、授業内で適宜話題に出し、生徒に興味・関心を持たせられるようにする。	B	B	○生徒が科学的な思考力・判断力・表現力を身に付けられるように、観察・演示・生徒実験を取り入れた授業を行い、レポートなども提出させた。来年度も、一層主体的・対話的な学びの場を工夫して実施し、生徒の科学的な思考力・判断力・表現力を身に付けさせたい。 ○デジタル教材の活用についても、さらなる工夫を進めたい。
		確かな学力の定着を図ると共に、生徒それぞれの進路希望に応じた学力試験に対応できる学力の養成を図る。	○基本的な原理・法則の理解を深め、さらに問題演習を重ねることで学力の定着を図るために演習量を確保する。また、校内試験ごとに解答の見直しをさせ、基礎学力および応用力の向上を図る。 ○国公立大学個別試験、難関私立大学試験の分析、また、大学入学共通テストに対応できるよう担当教員間での報告・連絡・相談を密に行い、授業や定期考査等に反映させることで学力の向上を図る。	B		○校内試験毎にテストの見直しをさせ、基礎基本の定着を図ると共に、大学入試の動向を踏まえ、授業や考査にそれらを反映し、学力向上を図った。大学入学共通テストを意識した問題を授業に取り入れるなど、今後も入試に対応できる学力の育成に努めていきたい。

評価項目		具体的目標	具体的方策	評価		次年度(学期)への主な課題
		新学習指導要領や大学入学共通テストに向け、研修の確保・充実を図り、教員の授業力向上・これからの時代に求められる教育のよりよい在り方に対する意識の向上を図る。	○新学習指導要領・大学入学共通テストに対応するための学習指導の在り方や校内模試の在り方など、これから本校の理科教育の在り方について検討を進めていく。 ○主体的な学びや対話的な学びの過程で、ICTを効果的に活用する。 ○ICTの活用などに際しては、教員間でのノウハウの共有化を図るなど研修の機会を設け、より教育効果の高い学習指導の充実に努める。	B		○学習指導の在り方や観点別評価などについて話し合いを進めてきた。学習指導において各自が実践した結果を、互いに共有し検討し合って、学習指導法の改善に努めていきたい。 ○ICTの活用を進めてきたが、ICTの活用について理科全体でノウハウを共有できる機会を増やし、なお一層充実を図ってきたい。
保健体育	各科共通	教科指導全般	○生徒が主体的に学習に取り組むよう、進路意識を高揚させながら指導する。	A		○生徒の主体的で深い学びにつなげるために各授業を通じて、生徒が教え合うこと学び合うことを促進したい。進路実現に向けて体力面からも積極的にアプローチしたい。
		充実した授業を展開し、各教科・科目の目標を達成する。	○60分授業の効果を高めるため、授業の進度や指導内容を再構築し、授業内容の充実に努める。 ○ICT機器(タブレット及び電子黒板)を活用して、より教育効果の高い学習指導の充実に努める。 ○60分授業を生かした指導方法等のさらなる改善を図るための研修を実施する。	B	B	○指導内容を段階的、系統的に体系化を図り、生徒の伸長に寄与したい。 ○体育実技におけるiPadを効果的に活用するために体育館へWi-Fi環境の整備。
				B		○研修会への参加や教科会を通じて授業方法の改善を図り、生徒の主体的活動の契機としたい。
	保健体育	歩く会の高い完歩率を維持させる。	○集団行動における規律と態度を学ばせ、有意義な学校生活を送らせる。 ○体力の向上のために計画的な授業を構築し、完歩への意欲を喚起する。	A		○伝統行事の「歩く会」の意義を理解させるとともに、コロナ禍における健康面への配慮を念頭におきながらも体力の向上を図ってきたい。
		体力テストの底上げを図る。	○本校生は筋力全般が弱いので、体育授業で毎時補強運動を実践する。 ○長距離走への積極的な取り組みにより、基礎体力の向上を図る。 ○本校性の弱い部分(投力)の強化向上を図る。 ○特別活動の体育分野における積極的活動を推進する。	B		○基礎体力の養成から体力の向上に繋がり、ひいては全てのライフステージにわたって心身共に健康的な生活や豊かなスポーツライフを送ることができる点を理解させ、粘り強く生徒の指導にあたっていきたい。 ○コロナ禍における体力低下への積極的なアプローチを図る。
		授業時のケガの防止に努める。	○運動の基本動作において、基本となる正しい動き方を身に付けることがスキルの向上のみならずケガの防止に繋がることを理解させる。 ○用具器具の使用について安全第一を心がけ指導する。 ○授業に臨むに当たり、健康観察、コロナ対策、熱中症対策、交通安全に努めると同時に、生徒にも健康安全に対する自意識の向上を喚起する。	B	B	○基本的なスキルの獲得と安全面への配慮を念頭に授業に取り組むようにする。基本的なスキルは競技性を高めるだけでなくケガの防止にもつながり、安全面の配慮は事故の防止につながる点を踏まえながら指導に努めたい。引き続き新型コロナ感染症防止対策にも取り組んでいく。
		「保健」とおとして心身の健康の保持増進を図る。	○「保健」を通じて、現代の健康問題や新しい時代の健康の考え方、安全な社会づくりなどについて理解させる。 ○「保健」の授業を通し、思春期から中高年期までに出あうさまざまな健康問題について学ぶとともに、労働や健康との関係や、働く人々の健康が保持増進されるしくみなどについて理解させる。 ○ICTの導入及び積極的活用を図る。(デジタル教科書)	A		○「保健」の授業では、各自の健康課題を理解させ、生活実践に活かす指導を行いたい。そのためには、グローバルな視点にも立ちながら各自の健康課題を積極的にとらえる指導に取り組んでいきたい。 ○興味関心を持たせるためのICT活用を図る。(動画等)
芸術	各科共通	教科指導全般	○生徒が主体的に学習に取り組むよう、進路意識を高揚させながら指導する。	A		○直接進路に関係する生徒は少ないが生涯を通じて芸術に関心を持てるような指導をしていきたい。
		充実した授業を展開し、各教科・科目の目標を達成する。	○60分授業の効果を高めるため、授業の進度や指導内容を再構築し、授業内容の充実に努める。 ○ICT機器(タブレット及び電子黒板)を活用して、より教育効果の高い学習指導の充実に努める。 ○60分授業を生かした指導方法等のさらなる改善を図るための研修を実施する。	B	B	○ICT機器が整備されていない教科もあるので改善を早急に願いたい。 ○実技教科ならではのICT活用をさらに研究し指導効果が上がるよう研鑽を積む。
				B		○表現と鑑賞を同じ時間で進めるなどの工夫をしているがその他にも有効な手だてがあると思うので教材研究の際に考慮していきたい。
	芸術	鑑賞の機会を確保するよう努める。感性を高め、人生を豊かにするという意識・態度を育てる。	○校外学習等や校内での鑑賞会を実施して、より多くの作品に接する機会を増やし、本物だけが持つ魅力を体感させ、豊かな感受性と人間性を身につけさせる。 ○様々な作風・ジャンルの作品を取り上げ鑑賞させる事により芸術に対する視野を広めさせるとともに、ものを見つめる目を養い、そこから真実を発見しようとする態度を身につけさせる。	B		○コロナ禍の影響で校外学習での鑑賞が実施できない状況ではあるが今後の動静を見ながら再開できるようにしたい。 ○多様なジャンルの作品を取り上げ広い視点で芸術を捉え、生徒の個性を大切にしながらその感性を高め芸術を重んじる精神を養いたい。

評価項目		具体的目標	具体的方策	評価		次年度(学期)への主な課題
		自発的に、課題に取り組む姿勢を持たせる。	○実技・実習の時間をできるだけ確保するとともに、その内容を精選し、工夫して実践できるようにする。基礎から応用までバランスの取れた授業内容を目指す。 ○アクティブ・ラーニングを意識した能動的な学習を取り入れ、より活性化した授業展開を目指す。 ○自分の表現を発表する機会を増やし、その表現を生徒同士で共有し理解し合う場面を多く設ける。	A	A	○コロナ禍による実技の制限がなくなってきたので元来の指導内容に戻すことができる。次年度からも様々な実技指導を実施し生徒が自発的に活動する場を増やしていきたい。 ○個々の活動に加えグループやクラス全体での発表の機会をさらに増やし、作品や表現について他者と思いを共有できるようにしたい。
		新たな教材研究に努める。	○新しい展開を生むための教材研究に努めるとともに、教師自身が技術向上の研鑽を積み、高いレベルでの指導ができるよう努める。	A		○趣向が多様化している生徒に対応できるよう教師側の知見も広げていきたい。芸術に関し常に敏感であるよう心がけたい。
各科共通		教科指導全般	○生徒が主体的に学習に取り組むよう、進路意識を高揚させながら指導する。	B	B	○主体的に学習に取り組むための仕掛けについて、さらなる研究が求められる。
		充実した授業を展開し、各教科・科目の目標を達成する。	○60分授業の効果を高めるため、授業の進度や指導内容を再構築し、授業内容の充実に努める。 ○ICT機器(タブレット及び電子黒板)を活用して、より教育効果の高い学習指導の充実に努める。	A		○新課程で求められる学力観に沿った授業展開、教材研究を学年間で引き続き協議していく。 ○ICT機器のより効果的な活用事例を教科内で共有していく。
			○60分授業を生かした指導方法等のさらなる改善を図るための研修を実施する。	B		○相互授業参観や教材の共有を促進していく。
	外国語	1年 4技能5領域の統合的な言語活動を通して、総合的な英語力の伸長を図り、実践的コミュニケーション能力の基礎と読解力および表現力を育成する。	○英語コミュニケーションⅠ:受容技能と発信技能のバランスのとれた指導を行い、英文を正しく理解し、外国語の背景にある文化に対する理解を深め、主体的・自律的にコミュニケーションをとるための基本的な知識と技能を養成する。 ○論理表現Ⅰ:英文法を軸に、場面を意識しながら表現を学び、情報や考えなどを論理的構成に基づいて工夫して話したり、英作文等で適切に自己表現したりするための土台を育成する。 ○サイドリーダーや単語帳等の自主学習課題を授業の内容や評価と有機的に関連づけることにより、自立した学習者としての態度を涵養すると同時に、知識、理解力および表現力の基礎を養成する。 ○全体のボトムアップを図るとともに、個々の能力に応じた適切な教材を適切な時期に用いることで、学習への動機付けを助長する。 ○観点別評価に対応するための試験問題の作成や試験のあり方の検討、パフォーマンステストを通して、信頼性と妥当性のある客観的評価を行い、学習の動機付けに資するような指導と評価の一体化を目指す。 ○1学年3月までに、CEFR A2レベル100%(245名)、B1レベル70%(170名)を目指す。	B	B	○コミュニケーション英語Ⅰ:検定教科書をベースに身に付けた読解力をどのように表現力につなげるかが今後の課題である。今後より複雑な文構造や教科書のトピックをベースとした発展的な(論理的、非論理的、より抽象度の高い)英文読解に段階的に取り組むことも課題である。 ○論理・表現Ⅰ:1年間で培った文法力を自己表現力につなげることが課題である。意見を書き連ねるだけでなく、どのように論理的に展開をするか演習的に授業展開することを課題とする。その中で、さらに論理的・批判的に考える力の育成を継続的に指導していきたい。 ○パフォーマンステストはレシテーション(暗唱)に主に取り組んだので、次年度はスピーチやプレゼンテーションという形で自己表現力の研鑽に取り組ませることが課題である。 ○作問時に、3観点を意識して作成し、また問題の表紙にそれを示すことで観点別評価を示すことが出来たが、今後授業内で扱う教材や活動の目的と観点をもっと明確に示す必要がある。 ○外部試験の受験を学校外を含めて積極的に促す(適性な受験級も含めて)ことが課題である。
		2年 4技能5領域の統合的な言語活動を通して、総合的な英語力の伸長を図り、実践的コミュニケーション能力を育成する。	○コミュニケーション英語Ⅱ:受容技能と発信技能のバランスのとれた指導を行い、英文を正しく理解したり、自分の意見や考えを表現したりする能力を養成する。 ○英語表現Ⅱ:目的・場面・状況を意識しながら表現を学び、スピーキングやライティングでそれを活用することや添削指導を通して、適切に自己表現するための知識や表現力を育成する。 ○サイドリーダーや総合問題集等の自主学習課題を授業の内容や評価と有機的に関連づけることにより、自律した学習者としての態度を涵養すると同時に、理解力および表現力のさらなる伸長を図る。 ○定期考査・実力試験問題の改良やパフォーマンス評価を通して、信頼性と妥当性のある評価を行い、学習の動機付けに資するような指導と評価の一体化を目指す。 ○CEFRB1(実用英語技能検定2級相当)の生徒90%(約255名)、CEFRB2(同準1級相当)の生徒10%(約30名)を目指す。	B		○コミュニケーション英語Ⅱでは、これまで2年間で確立してきた5領域の学習スタイルをいかに発展・深化させていくかが新年度からの課題である。文構造のより複雑な文章、語彙レベルの高い文章、抽象度の高い文章を教材とし、総合的な英語力のさらなる伸長を図っていく。 ○英語表現Ⅱでは、目的・場面・状況を意識しながら、流暢さだけでなく、大学入試を念頭に、表現面での正確さの指導に力を入れていきたい。 ○引き続き、課題を授業内容や評価と有機的につなげること、細やかな声かけをすることを通して、生徒の自律的な学習姿勢を育んでいきたい。 ○試験問題やパフォーマンス課題について、その信頼性と妥当性をさらに上げていく。 ○次年度も外部検定試験の積極的な受験を促したい。

評価項目		具体的目標	具体的方策	評価		次年度(学期)への主な課題
		3年 英語4技能の習熟に努めながら、より発展的な理解力および表現力を育成する。	○コミュニケーション英語Ⅲ:英語4技能の習熟に努めながら、難関大学入試レベル(英検準1級程度)に対応できる、実践的な英語理解力を養成する。3学年終了時点で、CEFERB2レベルの力を獲得できるように指導を実践する。 ○英語表現Ⅱ:英語で効果的に自己表現するための知識と技能、GTECグレード4～5に相当する、具体性・論理性のあるまとまった英文を書くことのできる力を養成する。英文を正確に組み立てる力を身につけ、難関大入試レベルの和文英訳に対応できる力を獲得できるように指導を実践する。 ○課題学習を効果的に活用し、授業での指導内容と関連させながら、自ら英語を学ぶ力を涵養する。必要に応じて説明動画等を提供することで、課題学習の充実を支援する。 ○夏季課外や個別の添削指導などにより、個々に応じた指導に努める。 ○テスト問題の改良や適切なパフォーマンス評価を実践して、生徒の英語力を正確に測るとともに、さらなる学習の動機付けに資するような評価の在り方を考える。		B	○コミュニケーション英語Ⅲでは、さまざまな活動を取り入れて、実践的な英語理解力の養成に努めた。大学入試問題(長文)の演習を実施した後で、ALTとのティームティーチングにおいて、読んだ内容について話し合ったり、英語で自分の考えをまとめるなどの活動を行い、深い学びにつなげることができた。また、Global Issuesとして現在世界的に問題になっているTopicを取り上げ、新聞記事などの読解、ディベートやエッセイライティングなどの活動を通して、英語で考え発信する力を養成することができた。 ○英語表現Ⅱにおいては、基礎的な英作文力を定着させること、与えられたテーマに対してまとまった英文を書く力を養成することを目標に、添削指導などを実施した。ALTが添削指導に加わる機会もあり、生徒の意欲向上につながった。 ○一年次から実施してきた課題学習を継続した。Classiに配信する説明動画を活用したスタイルは定着し、一定の効果をあげることができた。 ○三年間の活動を通して、多くの生徒たちがしっかりと英語4技能の力をバランスよく伸ばすことができた。一方、英語を苦手とする生徒たちに対して、継続的な支援をすることができればさらに良かった。
家庭	各科共通	教科指導全般	○生徒が主体的に学習に取り組むよう、進路意識を高揚させながら指導する。	A	A	○将来に向け一人ひとりが主体的に取り組めるように、用具の整備や2展開の授業を実施した。次年度は中高の授業計画を見直し、実習室の使用法等の両立を確立していきたい。
		充実した授業を展開し、各教科・科目の目標を達成する。	○60分授業の効果を高めるため、授業の進度や指導内容を再構築し、授業内容の充実に努める。 ○ICT機器(タブレット及び電子黒板)を活用して、より教育効果の高い学習指導の充実に努める。 ○60分授業を生かした指導方法等のさらなる改善を図るための研修を実施する。	A		○教員間で教材や指導方法の共有を十分に行うことができた。データ化するプリントを増やしたりなど、よりオンライン対応にも視野に入れて計画することができた。
				B		○生徒の実態や社会全体の傾向い合わせた「主体的・対話的で深い学び」を育成するための授業展開を構築していきたい。
		基礎・基本の内容を体験を通して理解させ、問題を見つけ、よりよい生活に変えていこうとする態度と生きる力を育てる。	○実験・実習内容を工夫と精選をし、知識と体験の定着を図る。 ○各分野における変化や問題を自分事として捉えられるように、高校卒業後の自分の人生に反映していこうとする態度が身につく授業の展開を図り、自ら学び自ら考える力を育てる。	B	B	○今年度は、実習に費やす時間を確保することができた。しかし、完全に以前のように戻すことができたわけではないので、次年度は再度実施計画を見直し、生徒一人ひとりの生活力の向上に繋がるよう努めたい。
		各分野の関連性・重要性を見だし、日常生活と比較させることで、主体的・総合的に生きようとする意識・態度を育てる。	○夏休みに各家庭で実施するホームプロジェクトでは、4月からの授業の中で全員が計画的に進めていけるように支援し、日常生活の中の問題点・改善点を認識させ、生活の質の向上に結びつくように工夫する。	A		○ホームプロジェクトは、夏季休業中の課題として実施を目標として4月から個々の課題解決のために計画的に取り組むことができた。次年度はより実生活に繋がるような課題に計画・実践ができるように支援していきたい。
情報	各科共通	教科指導全般	○生徒が主体的に学習に取り組むよう、進路意識を高揚させながら指導する。	B	B	○共通テスト受験までの学習の道筋を段階で示すことが必要である。
		充実した授業を展開し、各教科・科目の目標を達成する。	○60分授業の効果を高めるため、授業の進度や指導内容を再構築し、授業内容の充実に努める。 ○ICT機器(タブレット及び電子黒板)を活用して、より教育効果の高い学習指導の充実に努める。	B		○共通テストの試行問題の傾向を踏まえ、メリハリの利いた学習指導を進めていくことと、生徒の理解を深めるために、実践的な内容をさらに増やしていくことが必要である。
			○60分授業を生かした指導方法等のさらなる改善を図るための研修を実施する。	B		○長期的な指導計画について、さらに学んでいきたい。
		学習活動を通じて、情報モラルに対する知識・理解を深め、状況に応じた適切な行動ができるようにする。	○授業等において多様な手段(動画視聴や事例検討)を用い、生徒に当事者意識を持たせて、情報モラルが着実に定着するよう指導する。	C		○適切で継続的なモラル指導において、生徒が当事者意識を持って学ぶことができるようにしていきたい。

評価項目		具体的目標	具体的方策	評価		次年度(学期)への主な課題
		共通テスト新規実施科目として、最新の情報収集に努めるとともに、生徒がそれぞれの希望進路に応じた学力を身に付けられるよう指導する。	○共通テストへの各大学の対応に関する最新情報の収集をおこない、生徒に還元する。 ○「基本情報処理検定」や、センター試験や共通テストで出題された「情報関係基礎」等の問題分析をおこなう。 ○新学習指導要領のねらいに基づき、授業の中で生徒が主体的、対話的で深い学びができるようなワーク(作業)を取り入れる等工夫をおこなう。 ○クラウドの活用や、オンライン教材を用いて、生徒がその習熟度に応じた学習ができるようにする。	B	B	○共通テストの試行問題について授業で紹介し、今後学習を進めるにあたってどのように学んでいけばよいか生徒を支援して行く必要がある。 ○主体的・対話的で深い学びができるような内容を再構成し、生徒が効果的に学習を進められるようにしていきたい。 ○オンライン教材については、個別に学習を進めることができる利点以外に、コロナ禍でも生徒の学びを止めない効果があった。さらに効果的な利用方法を研修していきたい。
		生徒が情報科で学んだことを、日常生活の中で積極的に生かし、情報社会に主体的に参画できるようにする。	○Google Workspace for Education等の活用について指導するなど、生徒が他教科の学習や特別活動などにおいてICT機器を適切かつ有効に活用できるようにする。	B		○各教科、特別活動と連携し、より一層生徒がICTを効果的に活用できるようにすることが大切である。
教務		授業時間を確保する。	○自習をできるだけ避けるため、早めに出張・年休を把握し、可能な限り授業交換をする。その際、交換による授業の不均衡にも配慮する。さらに、授業の曜日変更により、定期考査間の授業時数の均一化をはかる。また、夏季課外を円滑に実施する。	B		○新型コロナウイルス感染症の流行による対応については、教科や学年と連携して、時間割の変更等、授業時間の確保に努めた。今後も継続したい。
		授業内容のさらなる充実を図るとともに、併せてICTの活用を推進する。	○60分6時間の授業をより充実したものとするため、研究構想部と協力し、教員相互による授業研究などを実施する。また、Wi-Fiを利用した授業展開を推し進めて、より教育効果の高い学習指導の充実にも努める。	B		○研究構想部主催の授業見学、中高連携コーディネーターによる事業等、教職員間の情報共有が活発になった。各種アンケートで高い評価を得ているものの、さらなる向上を目指したい。
		令和5年度以降の教育課程の検討をする。	○本年度から実施される新学習指導要領に基づいて、単位制を活用した、より教育効果の高いカリキュラムの構築を目指すとともに、大学入試制度の変更を踏まえて教育課程の検討を行う。また、医学コースの設置や中高一貫教育校に向けて各教科・分掌と連絡を取りながら教育課程を検討する。	B		○新学習指導要領に基づく教育課程の実施により浮上した課題について、丁寧に対応していきたい。大学入試における「情報」の扱いについても、引き続き最新の情報を収集し、対処する。
		教育活動を公表する。	○学校説明会委員会や研究構想部と連携して、中学生対象の水戸一高説明会、学習塾対象説明会の実施により、本校の教育活動を公開する。また、同時に、地域住民等に広く水戸一高の教育理念を周知する。	B		○小中学生向けの説明会及び学習塾対象説明会について、新型コロナウイルス感染症が比較的落ち着いた時期に重なり、対面で実施できた。デジタル機器やインターネットを適切に使用し、さらによいものにしたい。
		統合システムを円滑に運用する。	○校務支援システムの円滑な運用を進めるために、随時、管理体制の見直しや、活用法の研究に努める。また、システムの効率的運用で教員の授業研究時間の増加を見込む。	B	B	○観点別評価の導入による大幅な更新について、各学年と連携しながら円滑に運用をすることができた。
		学校行事を各分掌、該当学年と連携して円滑に実施する。	○入学式・卒業式を、関係する学年や各分掌と連携、協力して円滑に実施していく。 ○新型コロナウイルス感染拡大にともない、ICTを活用した儀式の実施など、今後も学校内外の状況変化に対応して各行事の企画・運営にICTの活用を図る。	B		○学校内外の状況変化に対応して、各行事の企画・運営におけるICT活用の具体的方策を検討した。
		奨学会関係の事業を、各分掌や各学年と連携して円滑に進める。また、同窓会との関係を深め、諸事業に協力する。	○奨学会との連携・連絡を適切に行い、奨学会総会並びに奨学会役員会の企画・運営を、各分掌や各学年と協力して円滑に進める。 ○保護者や学年への連絡・報告を適切に行い、様々な学校行事が円滑に進められるように内容を工夫・改善する。 ○同窓会との連携・連絡を適切に行い、諸事業に協力していく。 ○高等学校PTA連合会関連行事を用いて、本校教育活動の発信に努めていく。 ○学校内外の状況変化に対応した各行事の企画・運営について研究を進める。	B		○奨学会評議員の選出について、アンケートによりあらかじめ保護者の意思を確認してから依頼するという形式をとった。次年度も継続したい。 ○今年度、3年ぶりに奨学会総会を開催することができた。次年度もコロナ感染の対応をしながらできるだけ多くの保護者に参加していただける方式を考えていきたい。
		奨学金関係事務を適正に実施する。	○奨学金関係の事務および奨学生の選考に関する事項等を、ICTも活用しながら適切に行う。	B		○各学年と連携をしながら、適切に進めることができた。今後も継続したい。

評価項目	具体的目標	具体的方策	評価	次年度(学期)への主な課題
特別活動	学校行事を通じて、本校生としての一体感と誇りを持たせ、学校生活を充実させる。	○各委員会生徒と密接な連携を図り、明確な活動計画の基で各行事の運営を行う。 ○天候やその他の理由により計画通りにいかない場合に、適切な判断ができるよう、あらゆる事態を想定しリスクに備えるとともに、柔軟な生徒へのケアをおこなえるよう準備しておく。 ○積極的な生徒会活動への参加を促し、主体的な運営ができるよう指導する。 ○学習活動や他の諸活動とのバランスをとり、学校行事の満足度85%以上を目指す。	A	○コロナ禍を過ごしてきた生徒が行事運営の中心となっていく上で、伝統の継承とともに、コロナ禍により下降気味であった積極性を引き出すことが課題である。また、「コロナ以前に戻す」ことが「伝統の継承」ではなく、新しい発想を取り入れながら、状況に合わせ進化していくことが重要であると考え。 ○各行事の実行委員と一般生徒および保護者の温度差がやや離れているように感じる。より充実した情報発信によって温度差を埋める努力が必要。 ○附属中学が完成年度を迎え、中高連携して一体感を得られる行事の在り方を、引き続き模索していく。
	部活動を通じて、豊かな感性と健全な心身を育む。	○部活動と学習活動を両立している生徒の割合、80%以上を目指す。 ○各部活動で主体的な運営になるよう導き、リーダーとなる人材を育成する。 ○各団体の設備、備品の管理を徹底させる。	B	○県の新しいガイドラインを遵守しながらも、どうやって生徒の部活動の充実感を得られるようにしていくか、最難関の課題である。部活動改革が叫ばれるなか、生徒、教員の枠を越えて、学校全体でこれからの水戸一高の部活動のあり方を議論していく時期にきている。 ○附属中学が完成年度を迎え、中高連携の部活動をより充実させていきたい。そのなかで、主体性を育みリーダーとなる人材を育成していく。
	HRにおいてキャリア・パスポートを活用する	○各学年のHRにおいてキャリア・パスポートを作成し、社会の中での自身の在り方を考える。	B	○キャリア・パスポートの位置づけと活用方法、内容の精査について、さらに研究を深めていく。
進路指導	生徒を自己理解に根ざした高い進路目標へと導き進路希望の実現を支援する。同一年度の卒業生に関して、現役時と卒業後の合格者合計で、難関大学(旧7帝大+東工大+一橋大):80名、医学部医学科:25名、国公立大:220名を目指す。	○1・2学年と連携し、生徒の進路意識の高揚を図るとともに、授業を中心とした主体的かつ計画的な学習を促進させる。 ○コロナウイルスの影響で不確定な要素があるが、生徒が大学のオープンキャンパス(WEBも含めて)に明確な目的意識のもとで積極的に参加し、得たい情報を自らすすんで獲得しその活用がはかれるよう、学年との連携のもとで事前・事後の指導を強化するなど、その指導の在り方の工夫に努める。 ○東大を含めた難関大の研究を通じて、「難関大研究会」の機能をさらに強化し、学年間の情報共有に努め、進路希望の実現に結びつける。 ○大学入学共通テストに関して、学年や教科と連携し、定期考査等での出題の工夫をはじめとして新傾向の問題へ十全な対応を進める。 ○医学コース関連のプログラムを円滑に実施し、キャリア教育と学力増進の両面で医学科を志望する生徒への一層の指導の充実を図る。	B	○進路意識の高揚については、1・2学年団による積極的な生徒への働きかけが年間を通じて計画的に実施され、十分にその目標を達成できた。また、オープンキャンパスについては、今年度もコロナウイルス感染症の影響で従来の形では実施されなかったが、1・2学年を中心に丁寧な指導のもとで、WEBオープンキャンパスの視聴や、インターネット等を使った「大学調べ」などが生徒個々に進められた。次年度についても状況に応じたより効果的な指導の工夫していく必要がある。 ○進路からは予備校等から集めた難関大に関する各種の分析データを学年に提供し、学年では生徒の状況と照らしながら東大研究会を中心とする難関大研究会等が、各学年各々の問題意識を反映した形で、新たな取り組みも交えて効果的に実施された。次年度もこれを続けていく必要がある。 ○大学入学共通テストについては、教科において対応が進んでいる。実施3年目となる今年度の問題についてもしっかりと分析した上で、個別試験への対応を柱としつつ、しっかりと調整を図っていく必要がある。 ○医学コースの事業については、コロナウイルス感染症の影響が大変大きく、中止に追い込まれる行事等も出る中で、オンラインでの実施に切り替えるなど、出来る限りの指導を医学科志望者に向けて行うことができた。次年度も同様の制約を受ける可能性が残るが、その中でより有効な指導を工夫していきたい。 ○数値目標の達成度については、3月の結果を待つ。
	学年との連携を図り、生徒や保護者に、機を捉えて適切な進路情報を提供する。	○学年と連携し、進路講演会やガイダンスを通して、情報提供と生徒の啓発に努める。保護者に対しては、保護者対象の進路講演会や医学部進路講演会等も実施し進路情報の提供に努める。 ○生徒・保護者・教員の3者にとってより有益なものとなるよう「進学資料」、「進路の手引き」の改善を進める。	B	○学年との連携のもとで生徒対象の進路講演会を、それぞれ目的に応じて実施した。1・2学年については別個に保護者対象の進路講演会も実施し、多くの保護者のご参加を頂いたが、変わりゆく入試制度のその方向性や現状について、最新の情報を提供することができた。今後も継続したい。 ○1・2年生の医学部志望生徒の保護者を対象として、「保護者向け医学部講演会」も実施し、医学部入試の現状や医学部の実態等についてもお伝えすることができた。今後も継続したい。

評価項目	具体的目標	具体的方策	評価		次年度(学期)への主な課題
	生徒のデータを3年間通して見渡せる進路情報システムの改良と、その活用への環境整備を進める。	○3年間の学習成績と最終的な大学の可否がリンクした形でデータベース「佐々木システム」について、今年度も新たにデータの更新を行い、職員研修等を実施し、進路指導における有効活用をはかる。またこのデータベースを活用して指導に有効と思われる出力形態についても研究を進め、活用の幅を広げていく。 ○現役時はもちろんのこと浪人した生徒も含めて、進路確定まで継続的な指導を行う。	B		○第3回校内模試や1・2年次の実力テストの成績と、現役時及び浪人時の大学の可否が、大学、学部、学科別等で検索できるシステムが一昨年度完成し、今年度はその活用を進めることができた。今後ともデータを追加・更新し、さらに利用しやすさと信頼度を高めていきたい。 ○旧3学年による浪人生への激励会が年2回実施され、また、個別の相談にも対応することができた。更に充実させたい。
研究構想	「チャレンジ・プロジェクト」(プロジェクト「図南2」-21世紀型スキルを備えたリーダーの育成-)を充実させる。	○「心に火をつけるフォーラム」、「社会人インタビュー」、「校風の理解(講演会)」、「サイエンスセミナー」等の行事を通して、自分の在り方や生き方、進路について考えさせる。 ○「高大連携セミナー」や「知道プロジェクト発表会」を通して自ら課題を発見し、多様な視点から論理的に考察する力や自らの考えを他者に上手に伝える力を培い、「探究型リーダーセミナー」などの行事を通して、将来リーダーとして社会貢献のできる人材育成を目指す。	B		○多くの行事を実施することで過密スケジュールにならないように、次年度も引き続き、行事の実施方法についての見直しが必要である。 ○「課題研究」では、筑波大学教授による指導を継続し、探究学習の質的向上を目指した。今後も高大連携を深める工夫をしていきたい。
	教員の授業力向上を図る。	○「新任者授業見学会」、「校内授業公開」による校内での実践研修および、「筑波大学附属高校等の教育研究大会」、「駿台教育研究所の教育研究セミナー(オンラインも含む)」、「Find!アクティブラーナー(オンライン研修)」等による指導法研修を行い、質の高い授業を研究する。 ○「校内教員研修会」、「県外進学校視察」等を行い、難関大学進学指導やHR経営等の知識やノウハウを蓄積・継承する。	B	B	○授業力向上について、相互の授業参観の実施方法を見直し、教科内研修やオンライン研修の充実を検討する必要がある。 ○「県外進学校視察」は、感染症の影響と予算の関係で、1回しか実施できなかった。今後、オンラインでの交流も検討する必要がある。
	開かれた学校づくりを推進する。	○中高連携や、高高・高大連携を推進し、相互に連携・交流を深める。 ○茨城大学やJICAの留学生との国際交流を行う。 ○「学校公開」や「道徳公開授業」を行い、本校の教育活動や取り組みを広く周知する。 ○「知道プロジェクト発表会」の一般公開を行い、第三者に評価をしてもらう。	B		○「学校公開」は、「道徳」の授業を含めて午後の3時限を公開授業とした。どのような公開方法が良いかに関して、さらに検討をした。 ○2月の「知道プロジェクト発表会」では、大学教授による評価を取り入れた。次年度は、他校教員や保護者による評価なども検討していきたい。
	充実した教育活動により、未来を担う人材を育成する。	○「総合的な探究の時間」を通して進路意識と探究心を刺激し、自らの将来像を考えさせる。 ○「道徳」「道徳プラス」を通して、道徳的判断力や道徳の実践意欲・態度を育成する。 ○『課題研究優秀論文集』、『海外派遣プログラム報告書』、『紀要』、『本校独自の道徳ノート』を作成し、3年間を見通した学習の計画や1年間の教育活動の振り返りに資する。	B		○これまで、様々な報告書を冊子として残してきたが、オンラインでの閲覧が可能なものは、冊子を印刷する代わりに、PDFデータとしてまとめることも検討していきたい。
生徒指導	基本的生活習慣の確立を図る。	○挨拶の励行。特に来校者に対しては、積極的に挨拶をするよう指導する。 ○校外・地域等に進んで貢献・奉仕しようとする意識を持たせる。 ○規範意識を高め、水戸一高生として誇りの持てる行動をするよう指導する。	B		○ほとんどの生徒は挨拶の習慣が定着しているが、一部の生徒に不十分さが見受けられる。生徒に挨拶の習慣を定着させ、外部の方と会ったときも自然と挨拶ができるように取り組んでいきたい。
	学校生活の安全を図る。	○思いやりのある豊かな人間性を養い、人間関係を円滑にし、水戸一高生としての自覚と責任ある行動をとるよう指導する。 ○各学年・保健厚生部・養護教諭との連携を密に、生徒の状況を正確に把握し、生徒の心身の健全な育成を目指す。 ○インターネット依存症防止のために、スマートフォン等の適切な使用法を指導する。 ○インターネット上で個人やグループに対する誹謗中傷や、SNSでのいじめ、仲間はずれ、個人攻撃などをしないよう指導する。	B	B	○全体として「他者を思いやること」「水戸一高生として自覚のある行動をとること」ができており、落ち着いた学校生活を送ることができていた。スマホ活用のルール作りを年度当初行うことで、目立った使用についてのトラブルを避けることができた。1年対象「薬物乱用防止教室」・地域の防犯・パトロールや駅周辺巡回指導などを実施し、安全な学校作りに結びつけることができた。今後とも、地域や各学年等と連携しながら対応をとっていきたい。
	交通安全の意識を向上させる。	○自転車は車道の左側通行など、交通法規の遵守を徹底させる。 ○自転車による交通事故ゼロを目指す。通信機器等を操作しながら、またはイヤホンを使用しながら運転をしないなど、安全な自転車の乗り方を指導する。	B		○各学年とも軽微な自転車における交通事故が目立った。交通安全やイヤホン使用運転をしないよう、掲示物や、朝の昇降口での呼びかけなどを実施し引き続き注意喚起を促していきたい。
	いじめ問題に適切に対応する。	○いじめの未然防止にいつそう努め、いじめのない学校を目指す。 ○いじめを早期発見するために、各部署との連携を図り、職員全体で情報を共有する。 ○教職員対象に資料提示を実施し、いじめに対する意識を高める。 ○インターネットの適切な利用を指導することで、インターネット上のいじめを防止する。	B		○いじめ対策会議を定期的で開催し、情報を共有することでいじめの未然防止に努めた。紙媒体のアンケート以外にも、ICTを活用して3回の調査を含め、計8回実施することができた。今後も継続して会議を開催したり、教員研修を行ったりしながら、いじめなしの学校をめざす。

評価項目	具体的目標	具体的方策	評価		次年度(学期)への主な課題
情報	ICT機器の整備・管理・運用を適切に行う。	○GIGAスクール構想に基づき、引き続き校内におけるICT機器の再編・整備に努める。 ○ICT機器管理室の整備をさらに進め、適切な管理・運用ができるような制度設計をおこなう。	B	B	○引き続き適切な情報管理に努めていきたい。
	学校Webページの充実を図る。	○特に、学校行事や部・同好会活動、委員会活動など特別活動の情報発信を充実させる。 ○Webページのレイアウトや項目等を見直し、見やすいページに改編する。	C		○昨年度よりは内容が充実してきたが、速報性の点では課題が残る。新設の情報委員会を生かし、課題の克服に努めていきたい。
	教育の情報化へ向けた支援活動を行う。	○教育の情報化をより一層推進するため、ハードウェア、ソフトウェアの両側面から先生方の支援を進める。 ○他分掌、学年との連携を強化し、情報部として可能な支援を引き続き推進する。 ○個人情報の管理やウィルス対策等の注意喚起・情報提供をおこなう。	B		○校務用PCについて台数を優先したため、スペック的には劣るPCが多い。メインメモリの増設やSSD搭載のPCを配備するなど環境の改善が必要不可欠である。 ○スプレッドシートの連絡掲示板を活用し、さらなる情報提供や注意喚起に努めていきたい。
	効果的な学校評価アンケートを実施する。	○より効果的に、学校運営に生かせるアンケートにするため、質問項目を改善する。 ○保護者からの回収率を上げるような方策を実施する。	C		○Google classroomやClassiを活用して保護者に提出をお願いし、アンケート回収率は若干向上した。より一層、回収率を上げるような対策が必要である。
図書	生徒の課題発見と探求活動を支援する図書館として一層の充実を目指す。	○図書管理・検索システムのアップデート情報に留意し必要場合は適用を検討する。 ○教科からの授業内容に関連する推薦図書情報を得て、レファレンス・展示等をおこない、貸出し利用に繋げる。 ○選書について、多様な興味関心をもつ生徒にできるだけ沿い、中学生向け選書にも配慮をしてゆく。	B	B	○図書管理・検索システムの機材更新を検討する(ウィンドウズOS対応)。 ○教科・学年との取り扱い内容について情報交換をさらに進め、展示や紹介につなげられるようにする。 ○生徒の関心を広げ学習の興味関心を増進できるよう、幅広い分野から選書し、引き続き中学生向け選書にも配慮をしてゆく。
	読書体験の機会を設け意識を高め、読書に親む生徒の増加を図る。	○総合的な学習の時間(課題学習)での利用をはじめ、生徒一人ひとりの学習で一層の図書利用が進むように館内POP展示・新蔵図書紹介を進める。 ○読書会、ビブリオバトル等のイベントを感染状況に留意しつつ開催準備を進め、生徒どうしの読書体験の共有・啓発運動を行う。 ○各種読書コンクールへの積極的応募を勧め、校内表彰とあわせて読書への興味をさらに高める。	A		○一層の図書利用が進むように、継続して館内POP展示・新蔵図書紹介を行っていく。 ○感染状況に留意しながら、読書会やビブリオバトル等の体験を増やし、生徒どうしが刺激しあえる読書体験を検討・実施する。 ○中高生ともに、各種読書コンクールへの積極的応募を促し、読書と親しみ、読書を通して自ら教科学習内容や生き方を学ぶ生徒を育てる。
	生徒委員会が可能な範囲で最大限充実した活動となるよう支援を行う。	○毎日のカウンター当番等を活動の基盤としながら、学苑祭・読書会運営、機関誌編集などを主体的に運営できる生徒の育成をめざす。 ○感染拡大により、通常活動やイベントができないときに備え、より小さな生徒単位で行える効果的な方法についても計画的に実施を進める。	A		○生徒のカウンター当番の活動では感染防止に引き続き注意しながら、書籍の書架戻し・配架、メンテナンスなどの図書館運営の体験を通じて生徒が主体的な行動がとれるよう促す試みを行っていく。 ○イベント的活動ができないときに備え、引き続き小さなグループで実施できる読書会などの実施を検討する。 ○中学のサテライト文庫を中学生委員の活動として引き続き行っていく。
	機関誌発行で生徒に編集体験を積ませ、年報発行で本校の歩みを記録する。	○図書館報2誌の制作について、生徒を編集に参画させ計画的に発行する。 ○年報の発行に向けて、編集方針検討や資料収集作業を着実に進行。	B		○年報の発行に向けて、引き続き編集方針検討や資料収集作業を着実に進行。 ○図書館報2誌の制作について生徒の発案をできるだけ生かし発刊する。
保健厚生	学習環境の整備に努める。	○清掃箇所をクラスや部活動等の団体に適切に分担し、校舎内外の美化に努める。 ○新型コロナウイルス感染症感染拡大防止の対策をおこなったうえで、衛生状態が保たれるように取り組みを徹底する。(教室のゴミ箱を使用させない等) ○清掃用具やカーテンの劣化や衛生状態、適切な数量・道具がそろっていることの確認と交換・補充、石けんや洗剤の適切な補充を行う。 ○教室等の空気・照度検査、飲料水の水質検査、ダニの検査等を実施する。 ○施設・設備の安全点検を行い、学習環境の安全の確保を図る。 ○中高併設に伴い、不足したカウンセリング室等の整備を継続して行う。	A	A	○クラス数の減や体育館の長寿命化工事による担当箇所の変更、割り振りを適切に行う。 ○二酸化炭素測定器を活用し教室環境維持を継続。エアコンを利用する季節の換気の呼びかけが課題。 ○文化祭、歩く会等の取り組みを計画的に行う。 ○学校医、学校薬剤師等と連携し、各検査を効果的に実施する。
	心身ともに健康的な生活習慣の確立に努める。	○事故等の未然防止のために、担任や養護教諭等を中心とした保健指導を、適宜行う。 ○新型コロナ感染症感染予防を徹底し、生徒の必要な心のケア等につとめる。 ○各学年、生徒指導部、スクールカウンセラー等と連携し、生徒の心身の健全な育成につとめる。 ○健康に関する情報提供のための「保健だより」を、毎月1回発行する。 ○災害時における避難訓練を防災に対しての意識を高めるよう指導する。また、休日や校外においても緊急事態に対応できるよう意識づけを図る。	B		○課外活動や授業時の事故防止のため相談体制の確立、運動障害未然防止の呼びかけを継続して行う。 ○教室の換気等感染対策の注意喚起を継続して行う。 ○「保健だより」による健康に関する情報の提供を適宜行う。 ○防災避難訓練の実施や官公庁他から出される安全に関する広報物を活用し、生徒や教職員への安全に対する意識付けを行う。

評価項目	具体的目標	具体的方策	評価	次年度(学期)への主な課題
1学年	高校生活を送る上での基本的生活習慣の確立。	○時間厳守・挨拶励行 ○規範意識(SNS・情報機器の扱いを含む) ○環境整備・清掃 ○コロナ禍での健康管理 ○SHRでの統一的な指示・連絡	A	○生活上の問題行動(指導を受ける対象となるもの)は0件であった。年間を通じて落ち着いた生活をしたと判断できる。支援を要する生徒についても、スタッフ間の情報共有を通じて、適切に対応できた。 ○SNS・情報機器の使用に関しては、学習活動外での使用が目立ち、改善の余地がある。自由に使用をなかでいかに自覚を促すか、その対策や手立てを引き続き考えたい。保護者との情報交換も必要だ。 ○行事・授業についての統一的な情報提供が各HRで達成できた。学年朝会を勤務時間内で行う必要がある。要検討。
	1 高等教育を受けるための基礎的学力の育成(KPI3) 2 生徒個人に合った文理選択 3 授業力の向上(KPI2) 4 観点別評価の研究と実践 5 医学部・共テ「情報」・総合型選抜・学校推薦型選抜 動向の研究と生徒・保護者への情報提供(KPI4)	1 「教養」「抽象的思考力」を意識下に教授内容を研究・計画する。 2 進路希望・適性に沿った文理選択を促す。プロセスには関与し決定は主体的に行わせる。 3 授業公開の促進、教科間連動の教材研究を行う。 4 考査作問(教授内容)と評価との明示的なつながりを研究する。 5 「学年通信」他、保護者との連絡手段の構築を行う。	B	2. 文理選択に関して、各種の進路行事や講演会、担任の面談を通じて、適切に進めることができた。 1. 3. 教科間連動の教材は一定程度実現したものの、授業公開の促進にはつながらなかった。教科及び授業担当者の理解と協力を得る努力が必要だ。 4. 観点別評価の在り方については、教科内では一定程度の研究が進んだが、統一性のある評価の在り方、評価基準の生徒への提示、の2点については不十分である。 5. 保護者との情報共有、学校の見える化を進めてきた。より多くの機会を設けて情報の共有を進める必要がある。
	1 コミュニケーション力の養成 2 特色選抜入学生への支援	1 学校行事・部活動・委員会活動への積極的参加を促す。 2 部活動顧問との情報共有、学習状況の継続的調査(及び学習支援)、校内外行事で中心的役割を担える環境を醸成する。	B	1. コロナ禍で過去数年にわたり休止していた行事のほぼ全てを実施できた。部活動や委員会活動も含めて、生徒たちのコミュニケーションの場が十分に提供されていると判断している。 2. 文武両道という観点では課題が残る。現状では文武両道は達成できていない。部活動については、その適切な在り方について、学校全体の議論を待ちたい。
2. 学年	基本的生活習慣の徹底を図る。	○挨拶を中心とした誠実な態度を身につけさせる。 ○自主的な時間管理を意識させ、時間の大切さを再認識させるとともに、時間厳守を心掛けさせる。 ○定期的に生徒面談を実施することにより、生徒への対応を丁寧に行っていく。	B	○多くの生徒が、挨拶や清掃、時間の管理をしっかりと行い、落ち着いた学校生活を送っていた。しかし、挨拶が不十分な生徒、登校時間や提出期限を守らない生徒もわずかながらおり、面談等を実施し、今後も継続して指導する必要がある。 ○担任・養護教諭・学年主任等が連携し、生徒は、特に大きな問題もなく学校生活を送っていた。生活実態調査(全3回)において、学校生活に満足している生徒の割合は90%以上であった。
	自主自律的学習習慣の徹底を図る。	○各種進路行事に積極的に参加させ、進路意識を高めさせる。 ○数学オリンピック、科学の甲子園、IBRAKI ドリーム・パス事業等への積極的な参加を促し、知的好奇心を高めさせる。 ○予習、授業、復習の学習サイクルを徹底させる。また、家庭学習時間を確保させる。 ○1年次の探究学習を発展させた課題研究に十分取り組むことができる機会を設け、学問に向き合う姿勢を育成する。	B	○大学模擬講義や課題研究、オープンキャンパス等を通して、多くの生徒が進路目標を設定することができた。12月には3学年0学期集会を実施し、進路実現への意識を高めることができた。 ○科学の甲子園茨城県大会では、準優勝という成績を取めた。他校の生徒との交流は大きな刺激となった。 ○朝の授業開始前や授業間の休み時間等を活用し、学習時間の確保に努める生徒の姿が多く見られるようになった。
	特別活動への積極的参加を促す。	○学校行事、部活動、委員会活動への積極的参加を促す。 ○各種大会へ積極的参加を促す。	B	○生徒が中心となって学校行事を作り上げていくという意識が醸成された。部・同好会・委員会・生徒会のいずれかに所属している生徒の割合は、全体の95%以上であった。 ○運動部・文化部ともに、複数の部において県大会上位入賞、県外大会への出場を果たした。

評価項目	具体的目標	具体的方策	評価		次年度(学期)への主な課題
3 学 年	高い進路目標を掲げ、その実現に向け、妥協のない自己修練を促す。	○進路情報を精査し、高い進路目標を設定するための指導・支援。 ○授業を中心とした主体的かつ計画的な学習の促進。 ○進路実現にむけた意識醸成のための指導・支援。	B	B	○進路情報は今後も精査する必要がある。今年度は例年より予備校などから送られる資料の配付を少なくしたが、生徒が進路を選択する上で必要な情報は不足なく提供できた。 ○授業は受験を意識し、生徒が主体的に取り組めるものを多く提供できた。主体性を育むために、生徒に学習計画を考えさせる機会を増やす必要がある。 ○個々の志望大学、学部に合わせて模擬試験の実施や激励会を実施し、高い目標を維持させることができた。
	親和寛容の精神を涵養し、精神的自律を図る。	○自らの在り方・生き方に対する指導・支援。 ○個性や才能を伸ばし社会貢献しようとする進取の精神の獲得にむけた指導・支援。 ○社会の一員としての教養と品格を獲得するための指導・支援。	B		○最高学年として、各種学校行事、委員会、部活動において果たすべき役割を自覚し、行動することができた。 ○SDGsを意識し、各種ボランティア活動を積極的に行う生徒が多く出てきた。そのような生徒への支援を次年度以降も行う必要がある。 ○下級生、附属中の生徒との交流を通じて、自分たちの振る舞い、言動一つ一つを意識できるようになった。
	規範意識および基本的生活習慣の確立を図る。	○実社会に通用する普遍的な規範意識確立のための支援。 ○学校生活における時間厳守、挨拶・清掃活動の励行促進。	B		○学校生活のほとんどをコロナ禍で過ごし、欠席することに抵抗感がなくなった生徒が見受けられた。社会の考え方も多様化しており、今までの価値観では対応できない場面があった。生徒が実社会で活躍するときに身につけておくべき規範についても一度、教員間で確認をし、学校で支援していくことを明らかにする必要がある。 ○挨拶、清掃活動等はしっかりと行うことができた。

※評価基準 A:十分達成できている B:達成できている C:概ね達成できている D:不十分である E:できていない